

# 教育研究業績書

2016年10月01日

所属：心理・社会福祉学科

資格：教授

氏名：河合 優年

研究分野	研究内容のキーワード
発達心理学、教育心理学	発達理論、乳幼児発達、発達段階に応じた教育
学位	最終学歴
博士（教育心理学）、教育学修士、教育学士	名古屋大学大学院 教育学研究科 教育心理学専攻 博士後期課程 満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 新・プリマーズ 保育の心理学	2013年04月	編著として第1章、第2章、第3章、第4章、第5章、第12章を担当した。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		
1. Excellence in reviewing	2014年受賞	2013年 ELSEVIER (Infant behavior and Development)
2. 日本心理学会研究奨励賞	1988年受賞	Development of reaching behavior from 9 to 36 months

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 発達臨床心理士		2007年度資格更新
2. 学校心理士		2007年度資格更新
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. 1章 発達の視点からみたストレス研究の基礎と臨床	共	2013年09月 発刊	東京大学出版会	河合優年・佐藤安子 津田彰・大矢幸弘・丹野義彦（編者），臨床ストレス心理学. (pp. 25-40)
2. 児童心理学の進歩	共	2013年06月	日本児童研究所 金子書房	責任編集
3. 新・プリマーズ 保育の心理学	共	2013年04月 発行	ミネルヴァ書房	編著者：第1章、第2章、第3章、第4章、第5章、第12章
4. 発達科学入門[1]	共	2012年6月	東京大学出版会	ダイナミックスシステムズ・アプローチ高橋恵子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子（編者），理論と方法. (pp. 212-213)
5. II 乳児期3運動	共	2012年2月	東京大学出版会	高橋恵子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子（編者），発達科学入門[2]胎児期～児童期. (pp. 79-88)
6. 発達科学入門[2]	共	2012年2月	東京大学出版会	II 乳児期3運動高橋恵子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子（編者），胎児期～児童期. (pp. 79-88)
7. 学校心理学ガイドブック 第3版	共	2012年2月	風間書房	6章 発達心理学1. 学校教育の基盤としての発達心理学 2. 認知発達 . 学校心理士資格認定委員会（編者）. (pp. 79-87)
8. 生涯発達心理学[第2版]第3章 胎児期・乳児期	共	2012年10月	ナカニシヤ出版	第3章 胎児期・乳児期. 二宮克美・大野木裕明・宮沢秀次（編者）. (pp. 31-48)
9. 児童の心理と発達	共	2011年	東京書籍.	村田良輔・下川仁夫（編著），いのちを輝かせる生涯福祉の実践 (pp. 13-30)
10. 発達心理学 I 3章 乳児期	共	2011年	東京大学出版会	3章 乳児期. 無藤 隆・子安増生（編著），(pp. 149-179)
11. 縦断研究の挑戦—発達を理解するために	共	2009年02月	金子書房	3章 母子交渉と発達—短期縦断研究の結果から見えてくるもの
12. 心理学におけるダイナミカルシステム理論		2008年06月	金子書房	

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
13. 調査実験 自分でできる心理学	共	2007年04月	ナカニシヤ出版	32名のため省略 編集者：大野木裕明，宮沢秀次，二宮克美，河合優年
14. 感情の心理学	共	2007年04月		高橋恵子，仲真紀子，河合優年
15. ガイドライン 生涯発達心理学	共	2006年06月	ナカニシヤ出版	二宮克美，大野木裕明，宮川充司，田中俊也，中島実，宮沢秀次，原田唯司，吉田直子，浅野敬子，後藤宗理，河合優年
16. マルチラテラル心理学	共	2006年	有斐閣	中島義明，繁桝算男，箱田祐司，安藤清志，子安増生，坂野雄二，立花政夫，河合優年
17. キーワードコレクション 発達心理学 [改訂版]	共	2004年03月	新曜社	子安増生，内田伸子，落合正行，河合優年，木下孝司，斉藤文夫，二宮克美，松沢哲朗，渡辺雅之 本書は、発達心理学の研究手法と理論、胎児から死の受容に至るまでの生涯発達を、50個のキーワードで解説した初版を、研究の進歩にあわせて改訂したものである。8「生態学的アプローチ」、9「ダイナミック・システムズ・アプローチ」、13「熟達化」、16「児童観」、20「出生前心理学」の5項目を担当している。担当 (pp. 36~43, pp. 58~61, pp. 70~73, pp. 88~91)
18. 中学生の規範意識 (変容する子どもたち)	共	2003年06月	みるめ書房	内藤勇次，山口芳弘，川野賢一郎，河合優年，洲脇一郎 神戸市立中学校長会による中学生の規範意識調査として、1999年から4年間、のべ3500人の中学生を対象に質問紙調査を行った。その結果、触法行為に対して法に触れない携帯電話や茶髪などの行為は容認されやすく、進級する毎に容認の割合が増加、規範意識が弱くなることが明らかとなった。また本書には、教員らによる座談会や教育学者による分析、昨年度「シリーズ学校」を連載した神戸新聞社会部の寄稿等も収められている。
19. 言語獲得以降の情動の発達 (社会・情動発達とその支援)	共	2002年08月	ミネルヴァ書房	鯨岡峻，河合優年，繁多進
20. 認知発達と進化 第2章 運動の発達	単	2001年05月	認知科学の新展開 1 乾 敏郎・安西祐一郎 (編) 岩波書店	本書は、現代認知科学の先端領域に関する研究を集めたものである。本著の中では、不随意適な運動が統制される過程について、その解発刺激としての重力の問題が扱われている。(pp. 37~66)
21. 発達の理論	単	2000年02月	発達と学習の心理学 2章 福村出版 多鹿秀継・鈴木眞雄 (編)	本著は、発達心理学の領域における主要な理論を概観し、発達の機構とその心理学的な意味について考察したものである。(pp. 18~29)
22. 心理学事典	単	1999年01月	中島 義明・安藤 清志・子安 増生・坂野 雄二・繁桝 算男・立花 政夫・箱田 裕司 (編) 有斐閣	本事典の中では、発達に関する項を担当している。
23. ヒトから人へ	単	1998年03月	発達心理学 小嶋秀夫 (編) 放送大学教育振興会	生物学的存在としての「ヒト」が、社会的存在としての「人」になる過程について述べたものである。主な内容としては、胎児期の活動からはじまる発達段階ごとの行動特徴、その発達の意味についての記述などを中心とした、初期発達に関するものとなっている。(pp. 36~43)
24. 種々の機能が働き始める時	単	1998年03月	発達心理学 小嶋秀夫 (編) 放送大学教育振興会	人の感覚運動機能がどの様に発達してゆくのかを、視覚・聴覚・運動の各機能ごとに述べている。これらの機能は、従来発達の遅い時期に形成されるとされてきたが、今日ではすでに胎児期に形成されていることが明らかとされている。本章では、発達初期の機能が後の正常発達を準備するものとして、重要であることを論じている。(pp. 44~52)
25. 発達を作り出すもの	単	1998年03月	発達心理学 小嶋秀夫 (編) 放送大学教育振興会	発達現象をどのように理論的に説明するのかが、この章の目的である。私たちの行動の中で、時間とともに変化する遺伝的特徴を持つものと、学習によって作られる環境形成的特徴を持つものを上げながら、発達のメカニズムについて論じている。(pp. 53~60)
26. 自分でできる心理学 第3章 身体の左右差について考える	単	1997年04月	宮沢 秀次・二宮 克美・大野木 裕明 (編著) ナカニシヤ出版	本著は、心理学の入門者を対象としたミニ実践研究の為のものである。身体の左右差をもとに、脳内の機能差について考えさせ、行動と大脳生理学に関する関心を引き出すことを目的としている。(pp. 12~15)
27. 観察法	単	1997年04月	北大路書房 中沢 潤 (編)	ここでは、心理学研究法の中でよく用いられる観察法の、時間分析に関する方法論を中心に、行動解析の方法について述べている。時間分析に関する方法については従来あまりなく、筆者の導入したマイクロ分析は、これからの心理学研究の一つの方法を示すものとして多く引用されている。(pp. 108~121)
28. 乳幼児期の視覚運動発達	単	1997年03月	風間書房	本著は、専門書として位置づけられるものである。乳児期から幼児期にいたる上肢運動の発達の变化に

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
29. 看護実践のための心理学	単	1996年10月	メディカ出版	<p>ついて、大脳生理学的側面・行動学的側面から検討を加え、初期発達メカニズムを明らかにしようとしている。この中では、新しい発達理論としてのダイナミックシステムズモデルが提唱されている。</p> <p>本著作は、心理学の知見を看護実践の中でどのように生かすのかを視野にいれて、出版された実践書である。全体の編集と個人差に関する章の担当をしている。個人差の部分では、行動特性をどのように理解すればよいのかなどを通して、個人差を認めることの重要性を述べている。(pp. 127～134)</p>
<b>2 学位論文</b>				
<b>3 学術論文</b>				
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. -初期研修に向けて:新生児の潜在能力はすごい-母性を引き出す新生児行動</li> <li>2. 中高一貫教育10年目の検証 (1) : 一貫校生徒による一貫教育に関する評価結果について</li> <li>3. 子どもの社会性はどのように育つか</li> <li>4. Infant Responses to Maternal Still-Face at 9 Months predict Social Abilities at 18 Months</li> <li>5. Mission in Sucusuku Cohort, Mie :Focusing on the Feasibility and Validity of Methods for Enrolling and Retained Participants</li> <li>6. Mission in Sucusuku Cohort, Mie :A study Focusing on the Characteristics of Participants and the Mental Health of the Mothers Raising Children</li> <li>7. Developmental Trends in Mother-Infant Interaction from 4-months to 42months:Using an Observation Technique</li> <li>8. Developmental Trends in Mother-Infant Interaction from 4-months to 42-months:Using an Observation Technique</li> <li>9. Behavioral development of infant holding and its laterality in relation to mother's handedness and child-care attitude</li> <li>10. Contribution of Parenting Factors to the Developmental Attainment of 9-Month-Old Infants:Results From the Japan Children's Study</li> <li>11. (資料論文) 中高一貫教育のなりたちと展望:中高一貫教育の評価に向けて</li> <li>12. Behavioral development of infant holding and its laterality in relation with mothers' handedness and mothering</li> <li>13. 音楽と情動の心理学-音楽と情動獲得の知覚と認知の機構を考える-</li> <li>14. 地域における乳幼児歯科保健-第1報 乳歯う触罹患を測定する属性と歯科保健行動-</li> <li>15. Hikikomori in Japanese Youth: Some Possible Pathways for Alleviating this Problem from the Perspective of Dynamic Systems Theory</li> <li>16. 日本の子供の健やかな未来のために-第2報-すくすくコホートにおける三重研究グループでの短期予備的研究の被験者確保とその維</li> </ol>	<p>単</p> <p>共</p> <p>共</p> <p>共</p>	<p>2010年12月</p> <p>2010年10月</p> <p>2010年03月</p> <p>2010年02月</p> <p>2010年02月</p> <p>2010年02月</p> <p>2010年02月</p> <p>2010年</p> <p>2010年</p> <p>2009年</p> <p>2008年10月</p> <p>2008年10月</p> <p>2008年03月</p> <p>2007年</p> <p>2006年03月</p> <p>2006年</p>	<p>周産期医学</p> <p>全国中高一貫教育研究会紀要</p> <p>子ども学</p> <p>Supplement to Journal of Epidemiology</p> <p>Supplement to Journal of Epidemiology 2010 20(2) p. s407-412</p> <p>Supplement to Journal of Epidemiology -418</p> <p>Supplement to Journal of Epidemiology</p> <p>Japan Epidemiological Association</p> <p>Infant Behavior and Development</p> <p>Japan Epidemiological Association</p> <p>全国中高一貫教育研究会紀要</p> <p>Infant behavior and development</p> <p>臨床教育学研究</p> <p>「滋賀医科大学看護大ジャーナル」</p> <p>乳幼児発達臨床センター年報</p> <p>「国立医療学会誌 医療」</p>	<p></p> <p></p> <p></p> <p></p> <p></p> <p></p> <p></p> <p></p> <p></p> <p></p> <p>Michael J. Di Stasio</p> <p>上間美穂</p> <p>Alan Fogel</p> <p></p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
持一				
17. NICU LANシステムを利用した低出生体重児に対するカンガルーケアの生理学的検証	共	2005年	「周産期医学」	大谷範子
18. ストレス場面からの回復過程を規定する 新しい認知モデル構築の試み	共	2004年09月	武庫川女子大学大学院 臨床教育学研究	佐藤安子
19. システムとしての発達を考える	単	2004年03月	ベビーサイエンス 200 3 vol.3	本論文では、上肢運動の発達研究を題材として、単一の機能のトレースではその発現機構の一部しか解説しえない可能性が高いこと、システムとしてのダイナミックな変化こそ発達研究の対象であるということについて議論している。
20. 家庭の教育力について考える	単	2004年03月	研究紀要 財団法人日本教材文化研究財団 N o.33 家庭の教育力の 復権	本論文では、家庭における教育力が本当に低下してきたのか、また、もしそうだとするならばその原因はどこにあるのか、という点について考察している。子どもを取り巻く直近の環境は家庭であるが、その家庭はより上位の環境と相互に関係している。家庭の教育力は今日の社会が持つ力動的な病理という視点から、家庭の教育力について論述している。全 (pp. 50～55)
21. 初等・中等教育における知的財産教育のありかたについて	単	2004年03月	三重大学平成15年度受 託研究 大学における 知的財産教育研究報告 書	本論文は、初等・中等教育における知的財産教育をどのように展開すればよいのかについての展望論文である。総合的な学習など、新たな授業展開が可能となっているが、規範意識をどのように形成するかについては、工夫が必要となる。本報告では、これまでの文部科学省の取組などを含めた概要を展望している。全 (pp. 3. 8. 1～3. 8. 5)
22. システムとしての発達を考える	単	2004年	ベビーサイエンス	
23. 家庭の教育力について考える	単	2004年	研究紀要 財団法人日本教材文化研究財団 N o.33. 「家庭の教育力の 復権」	
24. 中高一貫教育の現状と展望 (Ⅱ)	単	2003年10月	武庫川女子大学教育研 究所 研究レポート 3 0号	中高一貫教育の現状と展望 (Ⅰ) においては、導入の経緯などについて議論を行ったが、(Ⅱ) では、法的な整備と教育課程について検討を行った。
25. 中高一貫教育の現状と展望 (Ⅰ)	単	2002年12月	武庫川女子大学教育研 究所研究レポート 29 号	中高一貫教育の歴史的背景について、46年答申、臨教審答申を中心に議論したものである。今日の中等教育改革の流れをその源流からながめている。全 (p p. 107～124)
26. 出生直後の新生児一児の有能性と子育てについて考える	単	2002年10月	周産期医学 32巻臨時 増刊	新生児の視力検査方法、行動評価方法を紹介し、その方法によって得られた知見を述べている。全 (pp. 400～404)
27. 新生児期の感覚・運動発達と胎外環境への適応	単	2002年08月	小児科(学術雑誌) 43 巻8号	新生児の感覚運動発達をシステムズアプローチの視点から切り取り、新生児医療のあり方について概観した上で、実験データを含めて適応との関係から議論している。全 (pp. 1069～1075)
28. 新生児の適応	単	2001年12月	日本小児科学会誌 105 巻 12号	子宮外環境への適応を、感覚運動系の発達から捉えた論文である。システムとしての発達が述べられている。(pp. 1311～1315)
29. 赤ちゃんはいつからどのように触角刺激を感じるの?	単	2001年07月	周産期医学 第31巻 7号 東京医学社	胎児が持つ感覚機能について、神経学的、行動学的視点からの議論がなされた。(pp. 934～935)
30. ナースのための研究法入門⑤	単	2001年03月	Neonatal Care 3 Vol. 14 メディカ出版	本著では、研究全体の流れと、論文の構成について述べられた。(pp. 82～85)
31. ナースのための研究法入門④	単	2001年02月	Neonatal Care 2 Vol. 14 メディカ出版	本著では仮説演繹的な研究方法について議論された。帰納的方法が発見的であるのに対して、演繹的方法が検証的方法であることが述べられている。(pp. 77～81)
32. ナースのための研究法入門③	単	2001年01月	Neonatal Care 2 Vol. 14 メディカ出版	本著では、実施の研究場面をシミュレーションして、研究計画を立てるということについて述べられた。これまでの変数の統制などを理解しながら、研究を進める方法が議論されている。(pp. 35～39)
33. ナースのための研究法入門②	単	2000年12月	Neonatal Care 12 Vol. 13 メディカ出版	本著は、研究法の中でも、要因の統制の必要とその方法が議論されている。研究結果が適切に分析されるためには、条件の統制が重要である。この統制という考え方が述べられている。(pp. 26～30)
34. ナースのための研究法入門①	単	2000年11月	Neonatal Care 11 Vol. 13 メディカ出版	本著は、観護研究の方法論を論じたものである。この号では、研究とはどのようなものか、またその捉え方はどこにあるのかなどが述べられている。(pp. 38～42)
35. 母性のシステムの理解について	共	2000年06月	日本母性看護学会誌 2 000, Vol. 1 (1)	河合優年・山本初実 本著では、母性性の理解を、母親を取り巻く諸要因との関係性から捉えている。これらから、母性性と父性性には共通のコアあることなどが明らかとなっ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
36. ダイナミカルシステムモデルは発達研究になにを与えるのか	単	2000年02月	児童心理学の進歩 金子書房2000,	た。分担 河合 (pp. 27~34) 本著は、三嶋らのダイナミックシステムズモデルと発達についての議論に対して、その意味をコメントリーとして述べたものである。新しい研究のフレームとしてのモデルの可能性が述べられている。(pp. 249~253)
37. 文化特異的養育行動と子供の発達—中国内モンゴにおける幼児教育と子供を取り巻く環境に関する予備的調査—	共	1999年03月	三重大学教育学部研究紀要 1999, Vol. 50,	河合優年・郭子蘭・佐藤朗子・馬樹清・郭立紅 本論文では、中国内モンゴの幼児教育の様子と、その背景として存在する、幼児教育観との関係が論じられている。分担 河合 (PP. 161~179)
38. 新生児行動と環境	単	1999年02月	Neonatal Care 1999, Vol. 1. 12(2). メディカ出版	本著では、新生児行動学が持つ意味について、新生児行動とそれに影響する環境という側面から議論している。視覚・聴覚・運動という、人の基本的な機能系がどのようにして出現するのか、また、それが他の機能系とどのように関係しているのかについて詳述されている。さらに、後の発達にとっての意味についても議論されている。(pp. 16~20)
39. New-born's spontaneous arm movements are influenced by the environment	共	1999年		河合優年・Savelsbergh, G. J. P. ・Wimmer, R. H. 本論文は、新生児の行動が何によって解発されるのかについて述べたものである。人間の赤ん坊は、誕生とともに、外的な環境にさらされることになる。このような環境が、どのような影響を与えるのかについては、まだ明確な見解がない。ここでは、新生児の行動をマイクロ分析し、環境がどのような影響を与えているのかについて、水中での行動と、空気中での行動を比較検討している。分担 河合 (pp. 15~27)
40. 新生児行動と環境	単	1999年	メディカ出版	
41. 母子関係の成り立ちと後の発達	単	1998年01月	Neonatal Care 1 Vol. 11 メディカ出版	母子関係を成り立たせているものはなにか、またそれを持続させているものは何かについて述べている。このような初期の母子関係の成り立ちが愛着の形成と密接に関係している。(pp. 10~16)
42. 子どもを取り巻く環境の変化とその問題点	共	1997年03月	三重大学医療技術短期大学部 紀要 Vol. 6	河合優年・多喜紀雄 本著は、21世紀の小児医療のあり方について、今日の問題点を明記しながら、人口動態などから予測される来世紀の子どもの問題について議論したものである。国立病院副院長との共著であるが、互いの立場からの意見が述べられている。総説として書かれている。分担 河合 (pp. 1~5)
43. The Development of Hand Movement During Presentation of an Object	単	1997年03月		本研究は、乳児に対して、視覚刺激を提示した時の上肢運動をマイクロ分析したものである。上肢の動きは、視覚刺激の有無によって上肢運動が変化すること、特に、刺激が提示されると、上肢の運動が抑制されることが明らかになった。また、微視的な検討では、指の開閉動作がみられ、発達初期においても視覚運動の協応動作が観察されることが示された。(pp. 15~23)
44. 現代医療とこころ	単	1997年03月	21世紀の長寿社会と看護 公開講座報告書	本著は、公開講座の内容を、資料を加えて整理しなおしたものである。現代医療では、こころの問題が重要視されながら、なかなかこころが中心に位置づけられていない。本著では、見えないこころをどのようにとらえているのか、その重要性はどこにあるのかを、心理学的な立場で議論している。(PP. 7~10)
45. P P Fモデルによるディスコミュニケーション分析の試み	共	1997年03月	三重大学医療技術短期大学部 紀要 Vol. 6	河合優年・廣岡秀一 本論文は、社会心理学の領域でモデルとして、ロスやワイナーなどによって提唱された、帰属モデルを使って人間関係の理解を試みたものである。従来これらのモデルは、看護領域で応用的に適用されたことがないが、本研究では、モデルを実践的な枠組みで捉えなおして、さらに事例に当てはめて検討している。分担 河合 (pp. 7~11)
46. 救急看護教育の実施と評価	単	1997年03月	救急看護学の教授方略および評価に関する研究 文部省特定研究報告書	(河合優年・中西貴美子) □本著は、救急看護に関する、特別講演の内容と、その教育評価をまとめたものである。講演録が中心であるが、学生の評価と理解力についての、統計的な検討が加えられている。教育評価を目的とした、実験的な講演授業録である。分担 河合 (pp. 11~64)
47. Developmental changes of early eye hand coordination in human infant-From the dynamic systems mode-	単	1996年09月		本論文では、ダイナミックシステムズモデルからみた、初期運動発達の様子が述べられている。
48. 救急看護とコーディネーション	単	1996年03月	モデルプランによる救急看護学教授の効果に関する教育臨床的研究 文部省 特定研究報	本論文では、救急医療場面で要求される、患者・家族医療関係者との、コーディネーションの問題について、今日問題となっている、移植医療を例に取りながら検討を加えている。ネットワークの構築と

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
49. Early Eye-Hand Coordination in Prematurely Born Babies	単	1996年03月	告書 重点領域研究 認知・言語の成立報告書(まとめ)	、人間関係のあり方について、心理学的な視点から検討している。(pp.42~48) 本論文では、発達初期の視覚と運動の機構を解明するため未熟児を対象とした、視覚運動研究の結果が報告された。この結果、胎児期にあたる週齢でも、視覚的に導かれた上肢運動が観察されることが見いだされた。この結果は、運動発達の成熟論と学習論に一石を投ずるものであった。(pp.142~143)
50. 認知・言語の成立 総括と研究の展望	単	1996年03月	重点領域研究 認知・言語の成立論文集(2)	本論文は、河合の行った生児・乳児期における感覚運動系の解発機構に関するこれまでの研究をまとめこれからの研究のありかたについての指針を示すことを目的として執筆されたものである。乳児・幼児研究が、後の発達とどのように関係するのか、また、その出現機構はどのようにになっているのかについて論じられている。(pp.300~305)
51. 精神・心理的ストレス～喪失～	単	1996年03月	ストレス(病)に対する看護について 教育研究特別経費研究報告書	本論文は、精神・心理的ストレスとして、比較的強度の強い、喪失経験の持つ意味と、その評価方法について述べたものである。位置づけとしては、看護となっているが、ストレス経験としては、より一般的な問題として位置づけられることが述べられている。(pp.31~38)
52. 乳児期における視覚刺激提示時の上肢運動	単	1996年	三重大学医療技術短期大学部 紀要 VOL.5	乳児の上肢運動を視覚刺激との関係から検討したものである。視覚刺激によって誘発される上肢運動は、基本的な運動コンポーネントを含んでいることが明らかにされている。(pp.15~23)
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
1. 全国病児保育研究大会 in三重		2008年07月		子どもの育ちと環境
2. 第10回日本母性小児看護学会 学術講演		2008年06月		育児を科学する
<b>2. 学会発表</b>				
1. 幼児期における行動抑制の発達変化(4) -5歳の観察室実験結果と5・6歳の母・先生による行動評価と関連-	共	2014年11月	日本教育心理学会 第56回 大会ポスター発表(於・神戸大学)	難波久美子・河合優年・佐々木恵・山川紀子・山本初実
2. A Cross Cultural Comparison of Japanese and American Elementary and Middle-School Children's Attitudes and Behaviors toward Academic and Social Issues 2 -From the Results of Japanese Students' Short Term Longitudinal study-	共	2014年09月19日	Proceeding and Abstracts of the 26th Japan-U.S. Teacher Education Consortium(JUSTEC)	Kawai Masatoshi, Jon Sunderland, John Traynor, Takai Hiromi, Terai Tomoko Presentation1, p.22, Tokyo Gakugei University(Japan) 口頭発表
3. システムズアプローチからみた発達過程(1)	共	2014年03月	日本発達心理学会 第25回 大会ポスター発表(於・京都大学)	難波久美子・河合優年・佐々木恵・小花和W. 尚子・山本初実・山川紀子・田中滋己・玉井航太
4. A Cross Cultural Comparison of Japanese and American Elementary and Middle-School Children's Attitudes and Behaviors Toward Academic and Social Issues	共	2013年05月	Proceeding and Abstracts of the 25th Japan-U.S. Teacher Education Consortium(JUSTEC)	Kawai Masatoshi, John Traynor, Takai Hiromi, Terai Tomoko, & Jon Sunderland Presentation10, p.21, University of Puget Sound (United States). 口頭発表
5. 子どもの育ちとそのメルクマールについて		2009年07月		講演
6. 日本の子育て文化		2009年06月		講演
7. 現代の育成期家族をめぐる看護実践の先駆的試み		2009年06月		シンポジスト
8. 子どもの発達を支えるもの:子ども達の明日に向けて		2009年02月		シンポジスト
9. 変容する子どもたち		2008年07月		講演
10. 医療従事者の精神衛生について		2008年06月		講演
11. 看護師のストレスマネジメントについて		2008年06月		講演
12. 縦断研究の発達心理学的意味再考	単	2008年03月		
13. パパママ講座～子どもの個性と育て方～	単	2007年12月		
14. 人を結びつけるコミュニケーション～感情と文化を考える～	共	2007年12月		余語真夫, 大坊郁夫
15. 子どもの成長から見た一貫教育～なぜ一貫校なのか。その成り立ちと現状について	単	2007年11月		

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
16. 語ろう、いまどき家族	単	2007年08月		
17. 乳幼児の発達と環境	単	2007年05月		
18. The Japan Child Study: Pilot Cohort Studies Based on Behavioral and Brain Science.	単	2007年04月		
19. Characteristics of upper limb movement of pre-term/LBW newborn babies	単	2006年07月		
20. 研究開発領域「脳科学と社会」 「発達コホート調査と脳科学の方法的接点」～真の学際的協調を目指して～	単	2006年03月		
21. 対立概念を通して見たダイナミカル・システム・アプローチ (DSA)	共	2006年		ワークショップ指定討論者
22. 幼稚園における食育のあり方に関する研究-1-	共	2006年		西元直美、沼田宙他
23. A pilot study of JCS As preparation of cohort study (I) infancy.		2005年11月		
24. 長期研究準備のための短期研究 (I) 乳児期		2005年11月		
25. 日本のコホート研究から	共	2005年11月		パネリスト
26. 日本のコホート研究から	単	2005年11月		
27. ダイナミカル・システム・アプローチ入門ーその現代的意味と今後の展開可能性ー		2005年09月		
28. 21世紀を担う子どもの発達を探る		2005年04月		
29. 新生児・早産児における生理的周期確立に関する研究	共	2004年11月		Begum Esmot Ara、盆野元紀、山本初実、駒田美弘
30. 早産児・低出生体重児の自発性運動の行動解析	共	2004年11月		内野理加、盆野元紀、山本初実、駒田美弘
31. 脳科学と教育		2004年09月		シンポジウム
32. 「ダイナミカル・システム・アプローチというパラダイムシフト」		2004年09月		ワークショップ話題提供者
33. ” Emotion intelligence and child rearing in culture”		2004年08月		シンポジウム
34. 日内周期の形成過程に関する研究	共	2004年03月		望木隋代 新生児の心拍、呼吸などの生理的活動が、週数とともにどのように変化するかを分析した。生後1カ月までの段階で、比較的明確なサーカディアンリズムが観察された。このことは、新生児の環境への適応が比較的早い段階から形成されることを示している。
35. 看護学生の共感性の発達と他者評価との関連ー精神看護学実習前後変化からの検討ー		2001年09月		(林智子) □看護学生の適性を、他者に対する共感性という視点からとらえ分析した。
36. 新生児期の感覚運動発達とその適応的意味		2001年06月		新生児の子宮外環境への適応過程をこれまでの発達研究をもとに議論した。招待講演者として話題提供を行った。
37. 不登校解決事例における母子関係の変化の過程ー学校における母子並行サポートー		2001年03月		(加藤裕子) □学校場面におけるカウンセリングの過程をプロセスレコードに基づいて分析し、その回復過程を明らかにした。(pp. 302)
38. 感情抑制の発達を規定する3つの要素：文化環境の要因		2001年03月		比較文化研究から見た感情の統制機能について話題を提供した。
39. NICULANシステムによる患児生体(生態)情報の一元化の試み		2000年09月		(山本初実・澤田博文・盆野元紀・田中滋已・多喜紀雄・駒田美弘) □WASJシステムを用いた、赤ん坊のモニタリングシステムについての発表がなされた。(pp. 104)
40. NICULANシステムを用いた児の48時間サーカディアンリズム解析とリスク予測		2000年09月		(望木郁代・山本初実・澤田博文・盆野元紀・田中滋已・多喜紀雄・駒田美弘) □未熟児のサーカディアンリズムと児のリスクとの関係について分析がなされた。(pp. 104)
41. 極、超低体重児に対するカンガルーケア：脳内酸素飽和度、NICULANシステムを用いた生態情報の解析		2000年09月		(伊藤美津江・盆野元紀・澤田博文・田中滋已・山本初実・多喜紀雄・駒田美弘) □カンガルーケアによる身体接触が児の脳血流に影響を及ぼすことが明らかとなった。(pp. 105)
42. Cultural Differences of Mother-Infant Interaction Between Ch		2000年07月		国際発達心理学会でのシンポジウムの企画および話題提供者として、日本と中国の子育ておよび情緒統





研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
-------------	---------	-----------	-------------------	----

5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等

ort Formを用いた幼児を対象とした気質の測定－横断研究から見た気質の発達的变化－				
---	--	--	--	--

6. 研究費の取得状況

1. 基盤研究(B) 新規	共	2015年		乳幼児期の個体・環境要因と児童期の社会的行動の生物学的基盤についてのコホート研究
2. 基盤研究(A) 継続		2013年		乳幼児期の個体・環境要因が児童期の社会的行動に及ぼす影響についてのコホート研究
3. 基盤研究(A) 継続		2012年		乳幼児期の個体・環境要因が児童期の社会的行動に及ぼす影響についてのコホート研究
4. 基盤研究(A) 継続		2011年		乳幼児期の個体・環境要因が児童期の社会的行動に及ぼす影響についてのコホート研究
5. 基盤研究(A) 継続		2010年		乳幼児期の個体・環境要因が児童期の社会的行動に及ぼす影響についてのコホート研究
6. 基盤研究(A) 新規		2009年		乳幼児期の個体・環境要因が児童期の社会的行動に及ぼす影響についてのコホート研究

学会及び社会における活動等

年月日	事項
	日本心理学会 日本赤ちゃん学会 教育心理学会 発達心理学会